

東京科学大学献体の会 会報 (旧 東京医科歯科大学献体の会)

けんたい

第51号

発行／東京科学大学献体の会
〒113-8519 東京都文京区湯島1-5-45 03-5803-5147
国立大学法人 東京科学大学医学部臨床解剖学分野



北アルプス燕岳のイルカ岩

日 次		ご挨拶		東京科学大学歯学部長		東京科学大学保健衛生学学科学長		東京科学大学関係行事		解剖体御遺骨返還式及び感謝状贈呈式	
学長追悼の辞		東京科学大学学長		田中雄一郎		田中雄一郎		東京科学大学保健衛生学学科学長		笛木 賢治	
学生追悼の辞		学生代表		天谷 優來		天谷 優來		東京科学大学保健衛生学学科学長		角 勇樹	
ならびに東京科学大学歯学部活動の報告会		東京科学大学歯学部活動の報告会		令和七年度解剖体追悼式		令和七年度解剖体追悼式		東京科学大学歯学部活動の報告会		東京科学大学歯学部活動の報告会	
令和七年度解剖体追悼式		学長追悼の辞		東京科学大学学長		東京科学大学学長		東京科学大学歯学部活動の報告会		東京科学大学歯学部活動の報告会	
学生追悼の辞		来賓追悼の辞		歯科同窓会会长		中村 勝文		中村 勝文		東京科学大学歯学部活動の報告会	
学生追悼の辞		学生代表		杉山友里乃		杉山友里乃		東京科学大学歯学部活動の報告会		東京科学大学歯学部活動の報告会	
『篤志解剖全国連合会関係行事』		『篤志解剖全国連合会・大学部会合同研修会』		田中雄一郎		田中雄一郎		田中雄一郎		田中雄一郎	
『篤志解剖全国連合会・大学部会合同研修会』		『篤志解剖全国連合会・大学部会合同研修会』		12 11 10		12 11 10		12 11 10		12 11 10	
なつひに第五十五回篤志解剖全国連合会総会		なつひに第五十五回篤志解剖全国連合会総会		7 6		7 6		7 6		7 6	
『会員寄稿』		『会員寄稿』		13 会		13 会		13 会		13 会	
【隨筆】		【隨筆】		渡邊 良夫		渡邊 良夫		渡邊 良夫		笛木 賢治	
見えぬ人の思いと命の有り方		生きる』ことは変わること		岡本 祐子		岡本 祐子		岡本 祐子		角 勇樹	
生きる』ことは変わること		クリーネックの眼科医たち		金村 美千子		金村 美千子		金村 美千子		金村 美千子	
クリーネックの眼科医たち		【詩】		床嶋 まちこ		床嶋 まちこ		床嶋 まちこ		床嶋 まちこ	
【詩】		【短歌】		松野 美佳		松野 美佳		松野 美佳		松野 美佳	
【短歌】		【俳句】		石田 信枝		石田 信枝		石田 信枝		石田 信枝	
【俳句】		【絵画】		中村 和子		中村 和子		中村 和子		中村 和子	
【絵画】		【絵画】		水谷 喜多子		水谷 喜多子		水谷 喜多子		水谷 喜多子	
【絵画】		【絵画】		片桐 千代子		片桐 千代子		片桐 千代子		片桐 千代子	
【絵画】		【絵画】		片桐 千代子		片桐 千代子		片桐 千代子		片桐 千代子	
【絵画】		【絵画】		配島 時雄		配島 時雄		配島 時雄		配島 時雄	
【五行歌】		【川柳】		光栄 勇夫		光栄 勇夫		光栄 勇夫		光栄 勇夫	
【川柳】		【五行歌】		操作		操作		操作		操作	
【五行歌】		【川柳】		パドバ大学解剖学教室		パドバ大学解剖学教室		パドバ大学解剖学教室		パドバ大学解剖学教室	
【川柳】		【五行歌】		バルト海フエリーからの日記		バルト海フエリーからの日記		バルト海フエリーからの日記		バルト海フエリーからの日記	
【五行歌】		【川柳】		『東京科学大学からのお知らせ』		『東京科学大学からのお知らせ』		『東京科学大学からのお知らせ』		『東京科学大学からのお知らせ』	
【川柳】		【五行歌】		『会員のご家族へのお願い』		『会員のご家族へのお願い』		『会員のご家族へのお願い』		『会員のご家族へのお願い』	
【五行歌】		【川柳】		『東京科学大学歯体の会役員』		『東京科学大学歯体の会役員』		『東京科学大学歯体の会役員』		『東京科学大学歯体の会役員』	
【川柳】		【五行歌】		『東京科学大学歯体の会役員』		『東京科学大学歯体の会役員』		『東京科学大学歯体の会役員』		『東京科学大学歯体の会役員』	
【五行歌】		【川柳】		『会報作成にあたって』		『会報作成にあたって』		『会報作成にあたって』		『会報作成にあたって』	
【川柳】		【五行歌】		『会報紙の写真説明』		『会報紙の写真説明』		『会報紙の写真説明』		『会報紙の写真説明』	
【五行歌】		【川柳】		○編集後記		○編集後記		○連絡先		○連絡先	

《ご挨拶》



東京科学大学

歯学部長 笛木 賢治

二〇二五年四月より、東京科学大学歯学部長を拝命している笛木賢治と申します。献体の会会員の皆様におかれましては、平素より本学の教育ならびに研究に対しても多大なるご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。心より感謝申し上げます。

私は、一九九三年に本学歯学部を卒業し歯科医師となりました。専門は、歯科補綴（ほてつ）というかぶせ物と入れ歯の治療を専門とする領域です。二〇二一年十月より咬合機能健康科学分野の教授を務めています。

私が解剖実習をさせていただいたのは今から三十五年ほど前のことになります。解剖実習は歯学科の授業の中でも最も印象深い科目で、今でも実習初日にご遺体を前にした時の厳粛な気持ちは鮮明に覚えております。人体の精緻な構造に直に触れ、生命の尊厳と医療者との責任を強く感じた瞬間でした。私が学生の時には、本学では学生四名に対しても一人のご遺体を担当させていただきました。他大学の歯学部と較べてとても恵まれた状況であり、大変感謝しております。その時から長い月日を経て、令和七年十月二十三日に築地本願寺本堂で執り行われた解剖体追悼式に本学教員として参列させていただき、改めて当時の事を振り返り感謝の念を新たにいたしました。

医師のみならず歯科医師にとつても、解剖学は歯学の基礎・臨床を学ぶ上で基盤をなす重要な学問です。歯科というと歯についてのみを学ぶと思われるかもしれません、実際には頭頸部領域の知識が必要

となります。例えば、私の専門である補綴治療の一つである全部床義歯の製作においては、顎の骨の形態、神経・血管の出口、筋の付着などが義歯の型取りと外形の決定に関わります。入れ歯を製作する際には、上顎と下顎の咬み合う位置を決める必要がありますが、この際には顎の関節の解剖が関係してきます。さらに近年では、口腔は人体の入り口として全身と繋がり、糖尿病や認知症など様々な疾患との関連が明らかにされつつあります。そのような点で頭頸部のみならず全身にわたり解剖実習に取り組んだことは、臨床家としての視野を広げる上で大きな意義があつたと感じております。

昨年十月に旧東京医科歯科大学と旧東京工業大学が統合して東京科学大学となり、早くも一年が経過しました。当初は、長く慣れ親しんだ大学の名称から「歯科」がなくなつたことに一抹の寂しさを覚えましたが、新大学としての理念「Science for Humanity（人の幸福のための科学）」に触れるにつれ、医学・歯学・理工学の力を融合して人々の健康と幸福に貢献する新たな使命を感じております。この一年間に開催された様々な新大学イベントを通じて、私自身も「東京科学大学」、英語略称の「Science Tokyo」に少しずつ親しみを持つようになりました。

本学歯学部は、QS世界大学ランキングの歯科領域で第四位と非常に高い評価をいただいております。第四位かと思われるかもしれません、五十四ある領域のうち五番目以上に入っているのは本学歯学部だけです。QS世界大学ランキングの決定には海外における本学の評判も含まれています。旧東京医科歯科大学の略称（TMDU）は歯学分野では特にアジアの大学の間で高い評価を得ており、これは歯学部の長年の国際交流活動の成果にほかなりません。大学名が変わることでランキングが落ちるのではないかと心配されましたが、幸いにもそのような影響はなく、まずは安堵しております。今後も教育・研究・国際交流の三位一体で高い水準を維持すべく、全教職員で努力を続け

てまいります。

歯学部に関わる最近のトピックスとして、昨年四月に設立された「口腔科学センター」についてご紹介いたします。本センターは前歯学部長の依田哲也先生のリーダーシップのもと設立され、二〇二五年七月に新たに発足した「国際医工共創研究院」に所属しております。センター内には「口腔全身健康部門」「口腔デバイス・マテリアル部門」ならびに「金子記念口腔科学共同実験施設」を設置し、医歯理工連携を基盤としたトランスレーショナル研究を推進しています。これにより、より有効かつ省資源（SDGs）で安全・安心な歯科治療技術を確立し、革新的先制医療としての「口腔医療」を国民に提供することを目指しています。

最後になりましたが、献体をされた方々の崇高なご意思に深く敬意を表するとともに、ご遺族の皆様のご尽力に心より感謝申し上げます。皆様の尊いご寄付が、未来の医療人を育て、国民の健康と福祉の向上に確実に結びついていることをお伝えし、末永いご健勝とご多幸をお祈り申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。

『ご挨拶』



東京科学大学

保健衛生学科 学科長 角 勇樹

東京科学大学 医学部 保健衛生学科 学科長を拝命しております角勇樹と申します。保健衛生学科には看護学専攻と検査技術学専攻があります。看護学専攻は一学年の定員は五十五人で看護師や保健師を目指して勉強をしています。検査技術学専攻の一学年定員は三十五人で臨床検査技師を目指して勉強をしています。合わせて一学年約九十人の学生が在席しており、医歯学系では医学科の次に多くの学生が在席しています。東京科学大学 医学部 保健衛生学科ではそれぞれの分野で指導的立場になりうるトップクラスの人材を輩出する教育を行つており、卒業後は大学院へ進学し教育者、研究者、行政などに進む学生も多くいます。

保健衛生学科における解剖学実習は、コロナ禍などで行えていたなかつた時期もありますが、現在では看護学専攻と検査技術学専攻学生全員が半日を費し行っています。「百聞は一見に如しかず」と言われていますが、書物やスライド、動画、模型などにて勉強するより、実際に自分の目で見て、触れて初めて人体の構造を深く知る事ができます。それよりも最も重要な事は、学生が献体を行つて頂いた方々へ感謝の念をいただき、「将来医療従事者として多くの患者さんの幸せの為に尽くすんだ」という誓いを持つ機会となつてている事だと思います。個人的な事で大変恐縮ですが、私は東京医科歯科大学医学部医学科を卒業しており四十年以上前に解剖学実習を一年かけて行いました。初日の実習は今でも鮮明に記憶しております。それまでは医学系でな

い学生と同じ道（講義、実習）を歩んで来ましたが、その日は医者になる事の意味を強く自覚する経験となりました。それまで概念では理解していましたが、実際に体験してみないと心からは分かりませんでした。その後多くの患者さんと接し多くの経験をしてきましたが、振り返って見るとこの日から私の医療従事者としての第一歩が始まったと言つても過言ではありません。

解剖学実習後に提出された学生レポートの一部をご紹介申し上げます。

〈解剖実習・献体制度について〉

医療系の大学だから、解剖があつて当然ではなく、そこには学生によい医療従事者になつてほしいという多くの人の思いが込められていますのだと感じました。全くの善意によって成り立つてある献体制度。私達はしっかりとそのことを認識しておくことが大事だと思います。そういうことを再認識できるものとして黙祷を心から行うことが大事だと思います。

【中略】

今後ともこの献体制度が成り立ち、多くの人々の理解を得るために、医療に携わる人間一人一人の姿勢、感謝が大事だと心から思いました。とても貴重な貴重な体験をさせていただき、献体の方、その家族、その他多くの方に感謝したい。

〈身体の構造についてわかつたこと〉

一日目には、胸郭内の心臓の上部の神経を見させていただいた。

【中略】

教科書だけではわからないものを三次元的にみれて、本物を知ることができ、感動した。ありがとうございました。

これは保健衛生学科学生により提出されたレポートですが、医学科

学生に勝るとも劣らない実習が行えたことがみてとれます。

献体を行つて頂いた方々と御家族様には感謝の念でいっぱいです。「人のために尽くしたい」という尊い志は、将来学生が医療従事者となれば医師、歯科医師、看護師、保健師、臨床検査技師の立場でチム医療の一員として直接患者さんに還元されますし、教育者、研究者、行政などに進めば、医療人材育成や医薬品開発、医療制度の整備などで社会に貢献する事になると思います。

献体の会会員の皆様とご遺族の皆様方の末永いご繁栄とご多幸をお祈り申し上げ、私のご挨拶とさせていただきます。



ファカルティラウンジからの富士山

解剖体御遺骨返還式は、献体者への感謝を表し、そのご意思を次世代に伝えるために毎年行われています。今年度は、令和七年二月六日（木）、七日（金）の両日、快晴の空の下、東京科学大学M&Dタワー二十六階ファカルティラウンジにおいて執り行われました。

ファカルティラウンジの大きな窓からは、遠くに美しい富士山の姿がくっきりと望まれました。ご遺族は窓際に立ち、

景色を眺めながら故人の思い出を語り合つておられました。式典を迎える前の静かな時間が、故人を偲ぶひとときとなっていました。

あらかじめ割り振られた時刻が近づき、準備が整うと一家族ごとに式の部屋へと招かれます。祭壇の両側には春の花がふんだんに飾られ、壇上には艶のある真白な布でくるまれた御遺骨箱が置かれています。祭壇の向こうに立つ解剖学教室の教授が故人の名前を呼び、家族が祭壇の前に進む

解剖体御遺骨返還式及び感謝状贈呈式

と、教授が献体への感謝の言葉を述べます。教授は、祭壇の向こうから回り込み、ご遺族の手にご遺骨を手渡します。

ご遺族の姿はそれぞれ異なり、涙声で故人のことを語るご家族もいれば、静かにご遺骨を抱え込むご家族もいました。それぞれのご家族が見せる仕草には、故人と共に過ごした日々への想いと、再び手元に迎えた安堵の気持ちがにじんでいました。

本年度も、医学部・歯学部の二年生が式典の運営に関わりました。式典開始前には、大学職員の説明を真剣なまなざしで聞く三名の学生の姿がありました。ご遺族が部屋に入ると、学生たちは一礼して迎え、ご遺骨を抱えて部屋を出るときには深くお辞儀をしました。式場への案内や感謝状を紙筒に納める姿からは、献体者への敬意と感謝の念を感じられました。

解剖体御遺骨返還式及び感謝状贈呈式は、ご遺族が故人を迎え、学生や教職員がその思いを受け止める場となりました。献体者のご意思は、医学・歯学の発展の礎となり、その貢献が今後も継承していくことを改めて感じる時間となりました。



学長 追悼の辞

東京科学大学

学長 田中 雄一郎

この度は、本学のより良き医療人、知と癒しの匠育成の為にご献体くださいました方々のご遺族の皆様に大学を代表して御礼を申し上げます。

本来であれば、ご遺族の皆様に、直接ご挨拶を申し上げたいところですが、感染症拡大防止の観点から、郵送でのご遺骨の返還または規模を縮小したご遺骨返還式を開催させていただくことといたしました。

さて、今日の医学・歯学の進歩は目覚しく、様々な領域で新しい知見が集積し、その上テクノロジーの進歩と相俟つて、新しい医療技術が開発され、人々の健康と社会の福祉に大きく寄与してまいりました。しかし一方では、ヒトの生命そのものに携わる医療人には、今まで以上に社会的責任や医療倫理が問われております。

医学生・歯学生が専門課程に進み、ヒトのからだに直接接する最初の経験が、人体解剖学実習であります。

ご遺体を通して人体の構造や機能の基礎を学びつつ、生命とは何かに思いを馳せ、その神秘性と尊厳に触れることがあります。

まず学生は戸惑い、畏れを感じることになりますが、やがて奇跡とも思えるその精緻な人体の構造を知るにつれ、これまで経験したこともない生命に畏敬の念を抱くことになります。

同時に、自らの御身体を医学・歯学の発展のためにささげるという、献体という行為が如何に崇高なものであるかを感じ理解することとなります。

そして、そのことに心から感謝しつつ、医療人としての教養と感性

を研ぎ澄ましてまいります。

医学の進歩とともに、医の倫理・生命倫理が強く呼ばれておりますが、解剖学実習に献じられたご遺体は無言のうちに「医の倫理とは何たるか」を学生に語りかけてくださっているのであります。

献体という崇高なご遺志を尊重し、今日までご遺体を私どもに委ねてくださいましたご遺族の皆様の寛大さと寛容に深く感謝の念と敬意を捧げる次第であります。

私ども医学・歯学教育に携わるものならびに学生たちは皆様のこの尊いお気持ちを本日さらに深く胸に刻み込んでまいります。

本学は旧東京医科歯科大学と旧東京工業大学が統合し、昨年十月より発足致しました。

新大学としてさらなる高みを目指し、皆様のご厚意に少しでも報いることができるよう、心を新たにし、一意専心医学・歯学の教育・研究・臨床の発展のために一層の精進を重ねることをお誓い申し上げます。

ご献体くださいました方々のご冥福をお祈りしつつ、深甚なる感謝を込めて私の追悼の言葉とさせていただきます。



学生 追悼の辞

東京科学大学 学生代表

歯学部歯学科二年 天谷 優來

はじめに、ご遺骨返還式にあたり、献体してくださった方々、並びにご遺族の方々に深く感謝の意を表しますとともに、謹んで哀悼の意を捧げます。

私たち歯学科生は、解剖実習の期間においてご遺体と真摯に向き合ながる実習に取り組み、多くの貴重なことを学びました。この期間を通じて、ご献体をしてくださったおひとりおひとりのいのちの尊さ、そして医療従事者を目指す私たちへと託された想いを深く感じ、身の引き締まる思いでした。この場をお借りしまして、私が実習を通して学んだことをここでは主に二点述べさせていただきます。

第一に、直接見て学ぶことの重要性です。教科書や講義資料は非常に有用ですが、人体の構造は時にそれらの資料とは異なり、細部において教科書等には表現されない多様性があることを知りました。血管の走行や筋の付着の様子を自分の目で見て触れ、観察することで、座学では得られない深い理解と確かな知識を身につけることができました。また、個々のご遺体に見られる細部の構造の違いを通じて、人体の神秘に触れるとともに、多様な患者さんおひとりおひとりに向き合う医療者としての意識が芽生えました。

第二に、医療系学生の教育は多くの方々からのご協力によつて成り立つてゐるということです。私の曾祖母も数年前に献体をしており、当時、家族が解剖されることに対する非常に複雑な思いがありました。しかし実習を通じ、ご献体くださった方のご遺族が私たちの学びが充実したものになるようという深い思いを抱いてご献体に同意してくれださったことに気づき、そのお気持ちに応えるためにも学び残す

ことなく真剣に実習に取り組もうと考えるようになりました。こうした方々のお気持ちへの感謝を胸に、身を引き締めながら学習に取り組む日々を過ごしています。

実習前、私は「歯科医師になるために全身の解剖を学ぶ必要はあるのか」と疑問を抱いていました。しかし実習を経て、歯科医師としての専門領域である口腔や顎顔面の健康が全身の健康と深く結びついていることを強く実感しました。今後、目の前の虫歯を治療するだけなく、患者さんおひとりおひとりに合わせた治療をしていくことが求められています。神経や筋の走行のみならず、全身の構造を正しく理解することが包括的診療に必要不可欠であり、解剖学実習が歯科医師を目指す私たちにとって非常に貴重な経験であったと確信しています。将来の進路はまだ明確ではありませんが、未来の歯科医師に託された使命とは何か、自分にできることは何かを考え続けながら、日々精進して参りたいと思います。

末筆ではございますが、改めて献体してくださった方々に心より哀悼の意を表しますとともに、ご遺族の皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げて、追悼の言葉とさせていただきます。



東京科学大学篤志献体活動の報告会ならびに 東京科学大学献体の会総会

令和七年度の東京科学大学篤志献体活動の報告会ならびに東京科学大学献体の会総会に関しましては、開催に向けた準備を進めておりましたが、諸般の事情により、開催を中止させていただくこととなりました。

つきましては、代替として昨年度（令和六年度）東京科学大学献体の会の現況報告を掲載いたしますので、ご一読いただけますと幸いに存じます。

令和六年度 東京科学大学献体の会

（旧 東京医科歯科大学献体の会） 現況報告

○令和六年度東京科学大学への献体成願者数

九十一名

○令和六年度三月三十一日現在の会員数

六七〇八名

総登録会員数累計 生存会員数

二三二六名

○令和六年度 東京科学大学献体の会 年間行事 (令和六年四月一日～令和七年三月三十一日)

六月 東京医科歯科大学篤志献体活動の報告会ならびに東京医科歯科大学献体の会総会

十月 大学統合に伴い、「東京医科歯科大学献体の会」から「東京科学大学献体の会」へ名称変更

十月 解剖体追悼式（築地本願寺において、ご遺族・来賓・教職員・学生が参加、Youtubeによるライブ配信）
献体者…二九五柱（病理解剖・法医解剖含む）

十一月 献体実務担当者研修会（東京歯科大学にて開催）

二月 御遺骨返還式および感謝状贈呈式（本学において二日間、午前午後の計四部構成での実施）

御遺骨返還対象者…八十七遺骨 感謝状希望者…五十遺族

三月 篤志解剖全国連合会団体部会・大学部会合同研修会ならびに篤志解剖全国連合会総会（幕張メッセにて開催）

その他、季節のご挨拶状送付（八月暑中見舞い、一月年賀状）

令和七年度 東京科学大学解剖体追悼式

令和七年十月二十三日木曜日午後一時より、築地本願寺において東京科学大学解剖体追悼式が執り行われました。

爽やかな風が境内を吹き抜ける秋の日、築地本願寺の正門をくぐると、莊厳な佇まいの本堂が静かに参列者を迎えてくれました。やわらかな光が石畳に落ちるなか、ご遺族、大学関係者、学生四三二名が席に着き、今年も解剖体献体者の皆様を偲ぶ追悼式が執り行われました。

式は、まず誓願成就された一〇二名のお名前の奉読から始まりました。静まり返った空間に一人ひとりのお名前が丁寧に読み上げられると、会場全体が深い敬意と感謝に包まれました。続いて、田中雄二郎学長より献体への御礼と追悼の言葉が寄せられ、ご来賓の中村勝文歯科同窓会会长からも温かいご挨拶を頂戴しました。また、学生代表の杉山友里乃さんは、解剖学実習で得た気づきと、献体者の尊いご意思への感謝を述べ、学びを次世代へつなげていく決意を示しました。

献花では、参列者一人ひとりが白菊を手に静かに歩みを進め、祭壇に心を込めて捧げました。献体者への思いが重なり合うように、会場には凛とした空気が満ちていきました。式は午後二時に閉会しました。式後には、本願寺のご厚意により法要が行われました。本堂の扉が開かれると、金色に輝く阿弥陀如来像が姿を現し、その前で雅楽が奏でられました。続いて参列者は浄土真宗本願寺派の作法に則りお焼香を行いました。最後に東森尚人副宗務長よりいただいたご法話は、多くの参列者の胸に静かに響き、心を温かくするものでした。法話は、やかに進み、午後三時に滞りなく終了しました。



会場

追悼式会場の築地本願寺

学長追悼の辞



東京科学大学

学長 田中 雄二郎

本日ここに、国立大学法人東京科学大学の解剖体追悼式を挙行するにあたり、解剖学・病理学並びに法医学解剖に、ご遺体を捧げてくださいました二七二名の方々に対し、謹んで哀悼の意を表すると共に深い感謝の念を捧げるものであります。

人体解剖学は、医学・歯学の次世代を担う医療人の育成に当たつて誠に重要な意義を持つております。

解剖学実習においては、学生はご遺体を通して人体の構造や機能の基礎を習得しつつ、初めて、死という逃れようのない生命の尊厳に直面します。これを機に、学生は「自分自身が快適に生きたい」という受動的・利己的な意識から、「自分以外の人が健やかに生きるために」という能動的・献身的な思念に変わり、自分たちは「世のため人の為に医学・歯学の道で研鑽を積むのだ」と、医療人としての決意を新たに、学んでいくことになります。

病理解剖においては、担当の医療チームが現代医学の叡智を駆使し、全力を挙げて治療に臨んだにもかかわらず、効を奏さず、ご遺族の願いも虚しく、帰らぬ人となつたご遺体を解剖させていただきます。ご遺体より提供された病巣や臓器の精査と治療結果から知り得る新しい知見は、同じように悩む他の大勢の患者さんの治療あるいは発症予防に役立てることができる貴重な示唆を与えてくださいます。

また、法医学解剖は、黙して語らぬご遺体の死因を特定し、時には犯罪性の有無を明らかにして、社会の秩序の維持に役立つものであり

ます。

このように、それぞれのご遺体は、それぞれのお立場で医学・歯学の進歩に光明を投げかけて下さり、そして人間教育の上で、何ものにも変えがたいご教示をいただき、学生を啓発してくださいます。

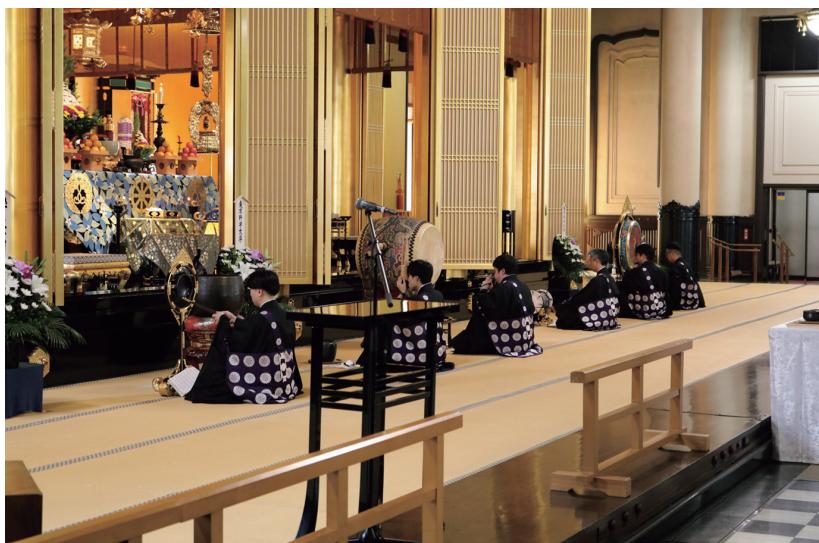
医学・歯学の発展のためとはいえ、自らご遺体を献体される崇高純粹な精神、そしてご遺族の示される深いご理解とその寛容なお心に、私どもは改めて深甚なる感謝と敬意を表する次第です。

旧東京医科歯科大学と旧東京工業大学が統合して東京科学大学が発足し一年が経過いたしました。

新大学としてさらなる

高みを目指しておりますが、此処に医学・歯学の教育・研究に一層の精進を重ねることを、固く誓うものであります。

東京科学大学は、菊薫る本日、ご遺族並びに献体の会会員の方々、そしてご来賓の皆様とともに、ご献体を賜りました故人の方々を偲び、ここに謹んで追悼の辞といたします。



法要の様子

来賓追悼の辞

東京科学大学
歯科同窓会会長 中村 勝文

本日ここに、国立大学法人東京科学大学の解剖体追悼式にあたり、謹んで追悼の言葉を述べさせていただきます。

私たち医学・歯学を志した者は、医学・歯学の教育、研究、臨床のために、かけがえのないご自身の身体をお託しくださった方々に、心よりの感謝と哀悼の意を捧げます。皆さまの崇高なるご意思により、私たちには貴重な学びを得ることができました。その献身がなければ、医学・歯学の進歩も、私たちの修練も成し得なかつたことを、深く胸に刻んでおります。

私たち医師・歯科医師を志す者にとって、解剖学の学びは、それまでの日常を離れ、人の身体の神祕を直に知り、生命の尊厳を理解する第一歩でありました。そして生命に関わる仕事を志すことの覚悟を自覚する第一歩でもありました。教科書や模型やバーチャルでは決して触ることのできない人体に向き合い、その奥に宿る命の重みを感じ取ることができたのは、ご献体を提供して下さった方々ならびにご家族の尊いご厚志あればこそであつたと思います。その学びは単なる知識にとどまらず、私たちに人を思いやる心と、命を守る責務の重さを教えてくださいました。

特に私達歯科医師は、顎顔面領域が専門になりますので、顎顔面の深い理解を持つて診療に当たらなければなりません。私自身、解剖実習においては夜遅くまで同級生とともに学んだことが、実際の診療において大きな糧となっています。

医学とは自然科学の成果を応用して人を助ける学問であり、そこにご献体から学んだ精神が活かされて人々を幸せに出来るのだと思います。今日の医学・歯学の発展はめざましいものがあり、新しい知見とテクノロジーの進化は人々の健康に大きく寄与しております。母校は、昨年十月に東京科学大学となり、自然科学の研究者との連携が深まり、ますます発展することが期待されています。

ご献体は無言の教育者として、無言の教えを与えて下さいます。声なき声に耳を澄ませ、伝えられた学びは、医の倫理として私たちの精神に刻まれ終生忘ることはないでしょう。医学・歯学を志す若き学生たちは、この経験を通じて、いかにテクノロジーが進化したとして、も、単に技術を磨くだけではなく、患者の苦しみや願いに寄り添う精神が大切なことを理解し身につけます。ご献体を提供された皆さまの崇高なご遺志が未来の医療人を育み、多くの命を救う礎となつております。

菊薫る本日、ここに、ご献体を提供された皆様に、謹んで深甚なる敬意と哀悼の意を表します。

また肉親を失つた悲しみならびに献体の会の皆様のご協力に衷心より感謝申し上げまして追悼の言葉とさせていただきます。



副宗務長によるご法話

学生追悼の辞



東京科学大学
歯学部歯学科二年 杉山 友里乃

はじめに、ご献体くださった方々、並びにご遺体を私たちにお預けくださいましたご遺族の皆様方に、東京科学大学の学生を代表して、心より深く感謝申し上げますとともに、故人の皆様方に謹んで追悼の意を表します。

解剖学実習で、ご遺体と向き合った日々は、言葉では表しきれないほど数多くの学びを私たちにくださいました。人体の精巧さ、生命の尊さをありありと実感し、患者様の命、そして人生を預かる医療従事者になる身として、私たちは先人たちが築き上げてきた医学・歯学を真摯に学び続けなければならないという自覚と決意を新たにすることができました。

実習では、教科書通りにいかない難しさと、命に向き合う重みに日々圧倒されおりました。様々な文献にあたり、丁寧に観察をしていく度に、人体の巧みな構造に深い感動を覚えました。人体の精緻なつくりを観察によって明らかにしてきた先人たちの努力に、畏敬の念を覚えました。そして、これまで医学・歯学の発展を支えてこられたのは、まさしくご献体くださった数多くの方々であると気づき、ご献体くださった方々に深い感謝と、崇敬の気持ちを改めて強く抱くようになりました。

ご献体くださった方々とそのご遺族の方々のお気持ちに思いを馳せる中で、皆様の想いを決して無下にすることがないよう、私たち医学・歯学生は、困難から逃げることなく、学び続ける覚悟を持たなければならぬのだと自覚いたしました。

ご遺体と向き合う中で、生前のお身体の中では数々の生命の営みが繰り返され、目に見えぬ微細な仕組みが生命を支えていたことを思い、生命の神秘と尊さを実感いたしました。今、私たちが生きているということは決して当たり前のことではなく、命はかけがえのない賜物であるということが改めて心に刻まれました。これからも、私たちは、生きていることへの感謝の念を抱き続けながら、一日一日を大切に、人生を精一杯生き、医学・歯学の発展と、人々の健康と幸せのために努力を重ねてまいります。

本日、このような式典を迎える私たちの解剖

学実習がこれほど多くの方々のご尽力により成り立つていていたのだということを実感しております。改めまして、このような貴重な機会をいただけましたことに深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、ご献体くださいました故人の皆様を偲ぶとともに、ご遺族の皆様のご健勝を心から念じ申し上げまして、追悼の言葉とさせていただきます。



学生による献花

篤志解剖全国連合会 第四十八回団体部会・

第四十八回団体部会・大学部会合同研修会ならびに第五十五回総会

令和七年三月十六日、千葉県千葉市の幕張メッセ国際会議場にて、篤志解剖全国連合会第四十八回団体部会・大学部会合同研修会ならびに第五十五回総会が開催されました。

団体部会・大学部会合同研修会は、佐藤二美篤志解剖全国連合会
会長（東邦大学医学部特任教授）の会長挨拶で始まりました。

今回の田代部会／医学部会合同研究会は「技術と自己開拓活動」をテーマとして開催されました。講演の第一は、篤志解剖全国連合会常任幹事／秋田大学大学院医学系研究科形態解析学器官構造学講座教授 板東良雄先生から「秋田大学における献体の現状と今後に向けて」、講演の第二は、篤志解剖全国連合会常任理事／東北大学大学院医学系研究科器官解剖学分野教授 大和田祐一先生から「東北大学の献体業務とCST事業の現状から見えてくるもの」と題して、近年問題視されている、献体業務の持続性に関するご講演がありました。

その後、続けて総会が行われました。総会は、影山幾男 篤志解剖
全国連合会副会長（日本歯科大学新潟生命歯学部教授）の司会のもと
行われ、羽生田俊 参議院議員、櫻井充 参議院議員などの挨拶（メッ
セージ）や、篤志解剖全国連合会の理事選出結果の発表、令和六年度
会務報告、収支決算承認などについての報告、協議があつた後に、会
は無事に終了しました。

4663 渡邊 良夫

我が伯父渡邊静プロ野球朝日軍・背番号二〇〇（＝現横浜DeNA）が六月六日知覧より振武隊一員として沖縄に向け出撃したのは、八十年前の事です。出撃前の一時帰郷時、弟である父の「特攻志願理由」の確認質問に、「球界から死以外の選択余地の無い特攻兵士に自分以外誰一人出したくない。又、野球が出来る時が来た時に、一人でも多くの球友・球界関係者が集える為」だつたとの事。

更に國・天皇の為の死ではない敵国スボーツである野球存続の為の死である事が知れると、「非國民！」と球界・球団・出身校（地元小・中、小諸商業の仲間＆近畿大学）・故郷（町・村）・家族・親戚への迷惑を考え、死後百年は親兄弟へも他言禁止厳命もその時受けたとの事でした。

補足說明

伯父の事に関しては、従兄中島正直が伯父に関する書籍「白球にかけた青春」を発刊する迄、父からプロ野球選手であつた特攻隊員の伯父がいた事を特段聞かされる事も無く、又、親子キャッチボールの経験も無く、中・高校の運動系クラブ検討時にも野球への提案も有りませんでした。それ程、伯父の特攻としての兄の捨て石的な死の覚悟は、我が父に特別のこだわりを持たせたと考えられます。

私は、父の気も知らず、「何で、最悪の特攻なんかになつたのか?」と質問をしたら、上記の説明が有りましたが、伯父は、戦争の為、高

校野球の甲子園大会中止に悔し涙するも、それでも、信州の片田舎から朝日軍へ入団が出来、近畿大学に通学しながら野球が出来るという好環境に感謝しながら、どんな正義感がそうさせたのでしょうか？

伯父の特攻入隊の第一目的は、敵兵殺戮ではなく、死しか選択の余地が無い特攻への野球人招聘防止でしたが、静伯父の特攻入隊・戦死でも、球界関係者（役員・選手）の特攻隊への入隊免除は軍人の誰も保証しないはずなのに！唯、伯父の入隊が、プロ野球関係者の陸軍特攻入隊への先達・呼び水行為とはならなかつた事は、幸いであり、自死をもつても、野球を守りたいという信念には、当時の世相を考えると空恐ろしくも有り、感服の念のみです。

又、天皇の為より野球の為の死の選択と言う当時の非国民的内容による迷惑に關しても、家族より野球関係者や地域の人への迷惑をまず思いやる心根にも、頭が下がる思いです。

出撃時の伯父の意は、せめても軍服ではなくユニホームで出撃したかったと思いますが、この十年米国球界や世界大会・オリンピックにおける日本人・日本チームの活躍には伯父も大喜びと思います。今後の活躍も見守つていています。

【隨筆】

生きることは 変わること

5239 岡本 祐子

アメリカの哲学者・心理学者のウイリアム・ジエームズ氏の有名な言葉と言われています。

心が変われば 行動が変わる
行動が変われば 習慣が変わる

習慣が変われば 人格が変わる
人格が変われば 運命が変わる

とても心打たれた私は、過去自分を良く見せたいという行為が、ありのままの自分ではありませんでした。多くの方々に對してまた自身に対しても誠心誠意が欠落しておりました。ご一緒に頂きました皆々様には、大変ご迷惑をお掛け致しまして本当に申し訳ございました。心よりお詫びを申し上げます。多大なる叱咤激励を頂戴したお蔭で身勝手だった自分が立ち直る事が出来、自分の軸を軌道修正する事が出来て、今の自分が有ります。お心根の優しい思いやりの心と真心のお持ちの素晴らしい方々との出会いは、何よりも自分の大きな大きな大きな糧でございます。自分を大切にすることが他者をも大切にする事に繋がる、とても大切なことを気付かせて頂きました。

人とは何者で何を得るのだろうか、自分自身でなければ意味がない、卑屈な言葉ではなくて心からの言葉を語れる人であります。

その言葉には、悪い言葉はひとつもなくて、悪いのは選び方と使い方だと分かり心を言の葉にのせる様に励みたいです。

二〇一五年のNHK大河ドラマ「べらぼうゝ薦重榮華乃夢嘶ゝ」の想定上、主人公薦重三郎の版元「耕書堂」の名付親は平賀源内で「書を以て世を耕す」とあります。私は、何を以て自分を耕すのか、自問自答しながら真摯にずっと前を向いて生きていきたいです。

「けんたい」第三十七号には、献体の会会長佐藤先生の「人間は相互依存しながら生きている」とお言葉がございます。

人間は一人では生きていく事ができない社会的存在だと教えて頂きました。

また、人間誰もが平等に与えられた財産は『時間』です。

この時という流れの中で、学んで不器用でも誠実に少しでも向上していく I am. This is Me. そして My Way. であります。

まだまだ未熟な心の琴線に触れ、深く感銘を受けて私が生きる為のお手本となる詩と出会えましたのも、第三十九回献体の会総会に出席した際に頂いた小冊子で当時学長でいらっしゃった大山喬史先生による「論語から学ぶ・医療人の心得と姿勢」がありました。その中に「行為の意味」という宮澤章二氏の詩が載っておりました。ここに抜粋いたします。

「行為の意味」（宮澤 章二）

一 あなたの〈こころ〉はどんな形ですかと

ひとに聞かれても答えようがない

自分にも他人にも〈こころ〉は見えないけれど

ほんとうに見えないのであろうか

確かに〈こころ〉はだれにも見えない

けれど〈こころづかい〉は見えるのだ

それは 人に対する積極的な行為だから

同じように胸の中の〈思い〉は見えない

けれど〈思いやり〉はだれにでも見える

それも人に対する積極的な行為なのだから

あたたかい心が あたたかい行為になり

やさしい思いが やさしい行為になるとき

〈心〉も〈思い〉も初めて美しく生きる

それは 人が人として生きることだ

これからもっと感性を豊かにして、人の心に響くような行為を心掛けたいです。

今回、載せて頂き、皆様にご一読頂けます事心よりお礼を申し上げます。どうも有り難うございます。

【随筆】

クリニックの眼科医たち

5941 金村 美千子

医療費が膨らんでいる。その要因として挙げられるのは、日本が長寿社会になつて老人が増えたことである。しかし、そればかりではない。ここでは、クリニックの眼科医たちについてのケースを三例あげたい。

ケース一

私は、病院で白内障の手術を受けた。その後に、担当のX医師がクリニックを開業したので、術後はXクリニックで受診することになった。

Xクリニックで雇われていた視能訓練士は、全員が新米であった。白内障の手術を受けると、術前に使用していた眼鏡は、度が合わなくなるので使用が不可能になる。そこで、X医師は、「週に一度来院するメガネ屋さん」に強制的に予約を入れさせていた。どこでどのようないメガネ屋をやっているのかなどの説明は全くなされず、ただ「メガネ屋さん」というだけであった。

私は、「メガネ屋さん」の予約を入れられそうになつた時に、「メガネ屋さんで、眼鏡を買わないといけませんか?」と、X医師に尋ねた。すると、「眼鏡の処方箋を作れば、眼鏡を買わなくてもいいですよ」と言われた。そこで、眼鏡の処方箋を作ることにした。

ところが、新米の視能訓練士は、私が乱視であるために、階段に連れて行つて、眼科のメガネフレームに次々とレンズを入れ替えては、階段のゆがみを言わせてから、数値をX医師に伝えた。

X医師の作成した眼鏡の処方箋は、封筒に入れられて封をされてい

た。眼鏡店に行くと、眼鏡の処方箋はコピーをした後に返して下さった。その処方箋には、矯正視力が左右ともに「〇・八」と記載されていた。新しい眼鏡をかけて、左目だけで見るのに比べて、右目だけで見るに、あまりにも見え方が悪い。それをX医師に伝えた直後に、新米の視能訓練士から「〇・六」にしたと聞かされた。「〇・六」は、学校の健康診断では、「教室での授業に多少影響が見られる」とされている。

X医師は、眼鏡の処方箋に記載する数値としては不適であると判断して、意図的に左右ともに「〇・八」と記載していたのである。

さらに、新米の視能訓練士のミスで検査を失敗しても、X医師はやり直しをさせないでそのままにしておきながら、患者に検査代を診療費として請求していた。

私は、X医師への不信感が募つて、Xクリニックへの通院を止めた。その後、A眼科クリニックで眼鏡の処方箋を作成してもらった。そこでは、ベテランのスタッフが、私の目を機械で測定した後に、A医師が診察をした。それから、スタッフが、正常な視力になるレンズを眼科のメガネフレームに入れて、「これをかけて、ふらつきがないか歩きながら調べてください」と言つた。乱視も矯正されて、遠方まではつきりと見える眼鏡であった。この時に、私の窓口負担からクリニックの収入を計算すると、約一万円であった。

患者は、眼鏡店に直接出向いて眼鏡を作ることができるにもかかわらず、X医師は、「患者にメガネ屋さんから眼鏡を買わせてリベートを得る」または、「眼鏡の処方箋作成で約一万を得る」のいずれかの方法を選択させていたのである。

ケース二

私が若かった時のことである。市民病院のY医師が、クリニックを開業して間もないころに受診すると、「網膜に〇・五ミリの穴が開いているのでレーザー光線を当てないといけない」と言わされた。私

は、腕の良い医師にお願いしようと思つて、K病院の眼科を受診した。すると、医師は丁寧に診察をしてから「網膜に穴は開いていません」と言われた。Y医師は、患者には無用なレーザー光線を当てて収入を得ようとしていたのである。

ケース三

私が若い時に、Z眼科を受診していたが、帰省してK病院の眼科を受診した。医師から「数日で治ります。自宅に帰つてから、Z眼科で一回だけ受診すると良いです」と言われた。Z眼科を受診すると、医師から「来週来なさい」と言われた。不審に思いながらも一週間後に受診すると、医師から「来週来なさい」と言われたので、私は「治つていないのでですか?」と尋ねると、Z医師は怒りを露にして「治つています」と答えた。待合室はいつも大勢の患者でいっぱいであった。

【詩】

生きていることを愛おしむ

6085

床嶋 まちこ

人生は一回きりだと思うと
齢を重ねるたび
今生きていることが愛おしくなる

人間は「人の間」と書く通り

様々な人との関わりの中で暮らしている
楽しみながら学び合つたり

心膨らむコミュニケーションを喜びあつたり
珈琲を飲みながらこれからのこと語りあつたり

かつては電話や手紙や葉書で交流したけれど今は便利なアイテムが幾つもある

スマホを使いLINEを活用すれば

二十四時間いつでもどこででも

自分の思いを相手に伝えることができる

打てば響く反応があれば

相手との距離が縮まり信頼感がぐんと高まる

気に入った動画や写真も

LINEなら即座に相手に届けられる

四六時中スマホを使いそれに縛られるより

毎日読む時間や見る時間を決めておけば

貴い時間を有効に使えるしより自由に生きられる

スマホ以外の情報源も重要だから

新聞には隅々まで目を通し

ラジオやテレビのニュースも視聴すれば

世の中の動きが見えてくる

自分に与えられた寿命は自分にさえわからないが

命のある限り信頼できる友人達と

心の交流を保ちながら

生きていることを愛おしみたい

【俳句】

うららかや 引き返すべき 道さがし

小気味よい 別れを告ぐる 菜花畑

寄居貝の 斑紋つづく 砂の家

砂丘には 時の流れと 冬鷗

人生を 古風に生きろ 寒鴉

【俳句】

献体の 娘に繋ぐ 最期の日

6433

松野 美佳

988

真柄 百合子

【短歌】

方形の 部屋より見ゆれ 音もなく
暮るるこの世に 降る秋しぐれ
捨てしひと 捨てられし我 おぼろにて
今まぎれなく 捨つるものなし
たそがれの 橋をゆき交ふ 人等みな
往くべき帰るべき 場を持ちてゐむ
娶らざる ゆゑはあらずも かかはれば
我に執する 醜さもあり
墜ちてゆく 我をとどまる すべもなし
夢のはたてに 咲く彼岸花

4850

光栄 堯夫

【短歌】

リハビリに 励みつわれは いたわられ
老ひの身悲し 若さほしけり
若き頃 輝ひて われなれど
今リハビリに 顔しかめたり
いつまでも ときめきたいの この私
痛ざこらえて リハビリ励む
リハビリ型 デイサービスに わが通ふ
膝痛愈えよ 機能訓練

一・二・三 体動かし リハビリで
かたい体に 号令かける

5791

石田 信枝

【短歌】

若者を 抜いて足元 鳴爽と
我が健康の バロメーターなり

脳腫瘍 手術をせずに 八年目
主治医の見立てに 今まで生きぬ

こんなにも 大腸検査が 辛いとは
亡母の苦しみ 今更に知る

「早期癌 確定です」と 医師告げる
ステージⅠで 手術日決まる

献体の 変わらぬ意思を この胸に
確かめ同意の 氏名欄記す

6418 日水操

【短歌】

ひな祭り 初めて作る 蛤の
汁はしょっぱし 涙と同じ

うつ病 やまい 笑顔少なき 希望なく
今は過ごせし 美しき日々

我娘 わがむすめ 会話なくとも 愛しけり
忘れられえぬ あの笑顔

【たばこ税・喫煙者に向けて】

たばこ税 国鉄赤字 補てんして
今の用途は 罰金か

たばこ吸う 家も外でも 煙たがれ
空に消えゆく 我が身かな

【娘にむけて】

六月の 早朝三時 母となり
報恩感謝 失い日々に

愛し子を 想えぬ時を 過ごしきて
戻らぬ心 今独り詠む

6433 松野 美佳

献体の 登録胸に うずくまり
縁故者名に 想い溢れる

【病との日々】

死に急ぐ 病の頃を 思い出し
生き急ぐまい 今の喜び

暗闇で 君の言葉を 音に乗せ
見向く先には 新緑の道



後ろかげ 敬う君へ 感謝をし
巡り来る日に 歩み進める

【短歌】

献体の 全ての手続き 終りきぬ
死後役立てよ 人工関節

手術ミス 三度もあれし ぼろぼろに
わが右腕には 人工関節

我が 酷み 他人は解らぬ 悲傷みか
二年の中 安堵欲しかり

ようこそと トイレが蓋開け 我を待つ
酷みし術後 寝ねられぬ夜は

我が息子 東大出づるも 三人共
誰か医者にと 願ひ遅かり

【川柳】

薬はリスク 言いながら 医者通い

この花火 ウクライナでは 爆薬に

クラス会 食後は皆 薬飲む

6719

日下部 雅代

5699

水谷 喜多子

【五行歌】

1304

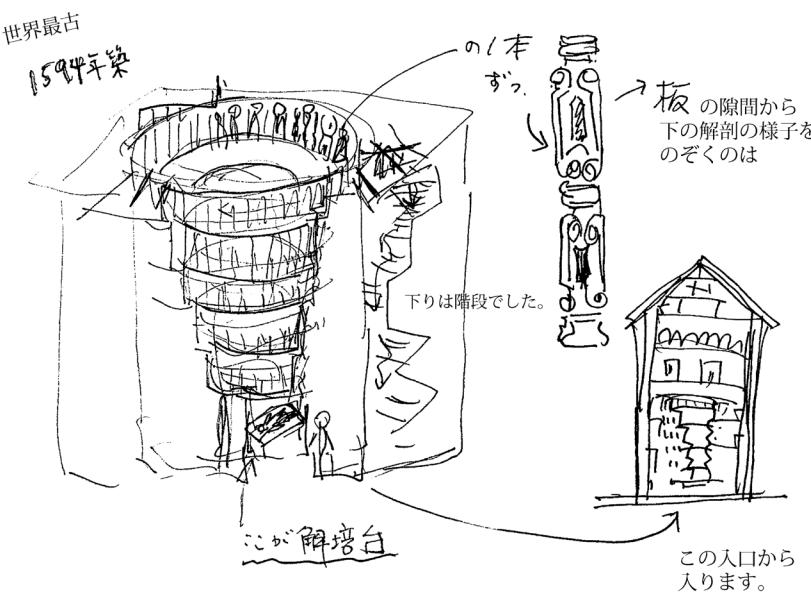
中村 和子

【絵日記】

パドバ大学解剖学教室の日記

5853 片桐 千代子

二〇〇七年四月八日 パドバ大学解剖学教室
 個人見学が主で、ゆっくりとはいからず・・・。押されてスケッチ
 ころではありませんでしたが、最上階からの見学は心身ともふるえが
 来ました。



一 満面の笑みを
 ピカピカの自転車にのせて
 施設へと急ぐアジアからの
 スカーフの女性たち
 お世話になります、よろしくね

二 蚊に指を刺された
 たくましい手足は
 それぞれ役割分担があり
 けいたい動かず吸血鬼
 しつかり止つてダンゴが出来た

【絵日記】

バルト海フェリーから の日記

5853

片桐 千代子

タリン（エストニア共和国）からヘルシンキ（フィンランドの首都）バルト海をフェリーで渡る。美しい古都の姿（街並み）が、スバラしい（タバン・エストニア・フィンランドとともに）



【絵画】惜別の鐘が鳴る



6068 菅島 時雄

スペイン・アンダルシア地方のアルゴス・デ・ラ・フロンテーラの丘に建つ教会に向かつて登る亡妻を置いてペンで描きました。

《解剖学実習を終えて》

学生感想文

※「東京科学大学臨床解剖学分野」のホームページにて、令和七年度の学生感想文を公開しておりますので、ご覧ください。

自分の学業を支えてくれる方々への感謝を胸に

医学部医学科二年 鈴木 沖一

まず初めに、献体してくださった方々に、本当に心より感謝申し上げます。

一生に数回しかない機会で、自分がそのような貴重な学びの機会を得られたのは、人生の最期に他者である私たちの医学に対する学習のために体を託してくださった方々の意思と、その意思を支えていただいたご遺族、並びに過去に献体をしてくださっている方々全てのご理解があつたからです。医学を志す私にとって、この経験は大きな転機となりました。

ただ知識を得るために動くのではなく、こういった日々の学びの背景にある尊い思いや他者の支えがあつて自分が学習を進められていることを忘れず、患者さん一人ひとりに真摯に向き合う姿勢を持ちたいと思います。

献体していただいた方々に自分が自信を持つて、

「ありがとうございました。自分のなりたい像の医師になり、人を救うことができています。」

と伝えられるようなドクターになりたいと心から感じています。謝申し上げます。

医師を志す者として

医学部医学科二年 油井 奏

はじめに、献体をしてくださった方々とそのご遺族の皆様に、心より感謝申し上げます。解剖実習を通じて、人体の構造だけでなく、生命に向き合うことへの責任といった医師になるうえで重要な多くのことを学ぶことができました。

実習では座学では得られない多くの学びを得ました。

実習前の座学ではなんとなく理解したと思つていたことでも、実際にご遺体を目の前にすると自分の理解が甘かったことを痛感し、実際のご遺体のものが教科書とは少し異なっていることなどがありました。

また、先生の「教科書に書いてあることが正しいのではなく、目の前のご遺体が正しいのだ」という言葉が特に印象に残っています。このことを通じて、私たちがこれから向き合うのは教科書ではなく、目の前の患者さんであるということを、身を持って理解できたよう思います。そして、学習の中で解剖学的知識の膨大さに圧倒されることもありましたが、それらは先人たちによつて築かれてきたものであり、そうした医学の進歩をこれから引き継いでいく責任も感じました。

最後に、改めて解剖実習という貴重な経験をさせていただいたことに感謝申し上げます。

献体への敬意と感謝の言葉

医学部医学科二年 坂本 遥紀

感謝と尊敬

医学部医学科二年 小池 達也

今回の解剖学実習で学べたことは主に二つある。

一つ目には人体の構造についての興味が一層沸いたことである。医学部を目指していたために、もともと人体の仕組みに興味があったのだが、今回の実習を通して実際に筋肉や骨を自分の目で確認することでき自分の中での理解がより深まることができた。このイメージは実生活にも役立つもので、筋トレをするときには骨の起始がどこから始まるのか、どのあたりまでその筋肉が分布するのかを理解できているために効率的に行うことができた。また、自分が怪我をした際、またニュースで見た際にも鞄帯や筋肉が具体的にどこにあり、どのようなものかを目で確認したため、怪我の治療に対する興味も沸くきっかけにもなった。

二つ目には、手先の器用さがあがつたことである。医学部に入る前、僕は手先が不器用なために自分は外科などには向いていないのではないかと不安を募らせていました。実際の実習に関しても、座学だけでは学ぶことのできない実技の上達を体感することができた。しかし、実習の回数を重ねていくごとに、手先が器用になつていき、そのようなミスをしなくなり、実習を円滑に進めていくことができるようになつた。

医学の発展の為に、ご自身のその体を献体という形で我々に提供してくださるという崇高なご決断をされた故人、またそのご遺族の方々に、心より感謝申し上げると共に、限りない尊敬の念を表させて頂きます。

私が実際に遺族であれば、どのような姿勢で解剖に臨んでほしいと願うだろうか。果たしてそれを満足する程のものを私が実践できるだろうか。感謝、尊敬の念と共に、そのようなことを常に自分自身にそう問い合わせながら、ご遺体を解剖させて頂きました。

解剖が進む中で、あくまでも「学ばせて頂く者」であるはずの私と、「恩師」であるご遺体。敢えてさらに踏み込んで申し上げると、「生者」と「死者」。これがさして違わないのではないかということを次第に思うようになりました。体の細部構造、生命の奇跡を目の当たりにする中で、私が今偶然、生を受けていること。また、「学ぶもの」の側に立っているということの意味を、深く見つめると同時に、この僅かな違いであるからこそその「生」の尊さを、肌で実感致しました。

人生に二度とない、言葉で表そうとする程その意味が薄れるのが惜しいと思う程の、貴重で有意義な時間でした。本当に、ありがとうございました。

解剖実習を支えて下さった方々へ

医学部医学科二年 山口 隆生

まず初めに、ご献体いただいた方、そのご遺族の方々、そして献体の会のみなさまに感謝申し上げます。献体という仕組みを支えてくださるすべての方々との信頼のもとに、この尊い実習が成り立っていると、いうことを、とてもありがたく感じております。

ご遺体はまさに魂の入れ物であると感じました。古代の人々やキリスト教徒の方々などは来世での復活のため、遺体を燃やさずに埋葬することもあるそうです。そのような大事なお体を預かり、刃を向けることに何度か申し訳なさを抱くこともありました。一方で観察を進める中で、医療のために自身を献げるという崇高なご決意を、そのお体に触れ解剖していくことを通じて感じ取ることができたように思いました。

講義動画を見て、また資料を読んでも、初めての解剖は難しいことはばかりでした。初めは道具の扱いも不出来で作業に自信もなく、遅れを生むこともしばしばありました。また少し慣れてくると、今度は観察できるものも増え、細かな部分に気を取られるということもありました。それでも全ての手順を終え、人体構造の多くを自分の目で観察できたことを嬉しく思います。

改めまして、解剖実習を行えたこと、重ねて感謝いたします。

はじめに、献体してくださった方、及びご遺族の方々に心より感謝を申し上げます。

生前のお姿やその方の人生を思うなかで、その一方で献体者の貴重な意志を無駄にしないという医学生としての責任感が芽生え、十分な予習をしてできるだけ多くのことを学ばせていただきました。

私自身にとつて今回の実習は、医者を目指す自分にとつての大きな一步目となりました。一つ一つの構造すべてに意味があり、それらが上手くかみ合って唸るほど巧妙に出来上がる人体の構造に、神秘性を感じました。

また一方で、自分は入学試験合格ばかりを目標にした高校の勉強から脱け出せないでいました。今回の実習は自分にとつて、実際の臨床現場で役立つ知識や技術を習得する必要性を痛感する機会となりました。テストで良い成績を取るだけでは、臨床で活かす力は養われないという現実に早く気づいたことは、私の今後の学習や成長に大いに影響する大切な財産です。

今回の解剖実習で献体してくださった方を、私の医者人生の最大の師として、学ばせていただいたことを礎にして今後の学習に励み、立派な医者になれるように精進して参ります。

解剖学実習を通して

医学部医学科二年 鈴木 舜一朗

人体解剖学実習を終えて

医学部医学科二年 大庭 里奈

はじめに、ご献体という尊く崇高な決断をくださった方々とそのご遺族に、深甚なる敬意と感謝を申し上げます。私たちは、この貴重な実習を通じて人体解剖学への理解を深めることができただけでなく、医療従事者の一員としての自覚を得ることもできました。

人体解剖学実習に臨む中でまず私が深い衝撃を受けたことは、教科書に描かれている様々な構造が、実際に眼で見て観察できるものとして存在するということです。それらの構造が確かに大きさを持つて存在するからこそ、そこに生じる不調により健康の悪化が生じるし、その不調も医学的なアプローチにより治療が可能であるということを実感を持つて理解しました。

また、実習を通じて人の身体それ自体の脆さを痛感するとともに、ご遺体の生前の姿や生きている人々の力強さに思いをはせ、生命の尊さと神秘的な美しさに感動しました。

最後に、このような貴重な経験の機会をいただいたことにはらためて感謝するとともに、社会に貢献できる医師になれるよう今後も勉学に励んでいく所存です。

命に向き合う姿勢について

医学部医学科二年 高崎 智光

人体解剖学実習は、教科書や模型では得られない命の重みを肌で感じる、非常に貴重な経験でした。まず、解剖対象となるご献体された方に対して深い敬意と感謝の念を抱きました。医学を学び、将来患者さんを治療するための学びの場として、その献身的なご協力に応える責任の重さを実感しました。実習では筋線維とその付着部、神経が走る真の位置関係など、教科書で読む以上に鮮明で立体的に理解できました。また、チームワークの大切さも強く感じました。他の学生と協力しながら、手技や観察結果を共有し、互いにフィードバックし合うことで、知識だけでなく、協調性やコミュニケーション能力も磨かれました。

一方で、初めは人の身体と向き合うプレッシャーや心理的抵抗もありました。しかし命の重みを肌で感じることで、医療従事者としての覚悟がより明確になったと感じています。総じて、この実習は単なる技術習得にとどまらず、人間の身体や命の尊さ、専門職としての倫理観、そしてチーム医療の重要性を深く自覚する機会になりました。今後の臨床実習や将来の医療現場において、この貴重な学びを活かし、命と向き合う姿勢を忘れずに努力していきたいと思います。

命と向き合う初めての実習

医学部医学科二年 モー カワイ

この度、医学の学びのためにご献体くださった方々、そしてご遺族の皆様に、心より感謝申し上げます。

この度、医学の学びのためにご献体くださった方々、そしてご遺族の皆様に、心より感謝申し上げます。

解剖学実習を通して、実際に人体に触ることで、教科書では理解が難しかった立体的な構造や、個々の身体に見られる多様性について、より深く学ぶことができました。

ご遺体に向き合う中で、知識としての学びにとどまらず、命の重みや医療者としての責任についても深く考える機会となりました。私にとって、ご献体くださった方は、医学生として初めて接した「患者さん」であり、教科書の知識に臨床的な意味を持たせてくださった、大切な存在です。毎回の実習では、どれほど予習していくても、実習を通じて新たな発見や自分の未熟さに気づかされ、そのたびにさらなる学びへの意欲が湧きました。

この貴重な経験は、今後医師として歩む上での土台となり、これらの学びや臨床の場において、必ずや生かしてまいります。

改めまして、尊いご決断をしてくださった皆様に、深く御礼申し上げます。

歯学部歯学科二年 宮下 耀

はじめに献体をしてくださった方々、ご遺族の方々ならびに解剖実習に協力してくださった方々に感謝申し上げます。

今回の実習を終え、歯科医師になるという決意がより強くなりました。解剖実習をするまでは医療系の学生とは言え、他の理系の学部の学生とそこまで大差のない学生生活を送ってきたため、自分が医療従事者になり患者さん達の生命に関わるという姿が遠い未来のような気がしていました。今回の実習を通じて、皆様に私たちが将来医療従事者として多くの人々の健康を支えることに対する期待していただき、教育機会を設けていただいたことを強く感じています。献体してくださった方々や同意してくださったご遺族の方々の尊い思いを将来医療従事者として近くすことで応えられるように日々精進してまいります。

最後になりますが、貴重な機会を提供してくださった皆様に感謝申し上げます。皆様の期待に応えられるように医療系の学生として精進してまいります。

歯学部歯学科二年 市瀬 日那

はじめに、解剖学実習のためにご自身のご遺体をご献体してくださいました皆様、ならびにご遺族の皆様に心より感謝申し上げます。

解剖学実習を通して、歯科医師になるにあたり非常に重要な解剖学の理解をより深めることができました。実習前から座学や自己学習を重ねてきましたが、実際に自分の目で確かめ、手で触れたことで、それまでの知識が立体的に結び付き、学びが確かなものとなりました。特に、頭頸部の構造を自分で確かめられたことは歯科医師を志す私にとって大きな意味を持ち、臨床に直結すると強く感じました。加えて、今回の解剖学実習を通して、歯科医師になるにあたっての自分自身の覚悟や責任感がより強固なものになつたと感じています。

初めてご遺体を前にした時には緊張もありましたが、実習を進める中で深い感謝と尊敬の気持ちでいっぱいになりました。ご遺体を託してくださった重みを忘れずに、この経験を歯科医師としての原点として持ち続けたいと思います。今後は、ここで得た学びを土台に、多くの患者さんの健康と幸福に貢献できるよう、努めてまいります。改めまして、このような貴重な機会を与えてくださった皆様に、心より御礼申し上げます。

〔東京科学大学からのお知らせ〕

◎大学統合に伴う本会名称の変更について

日頃より東京科学大学の医学及び歯学教育ならびに篤志献体活動に対するご理解とご協力に深く感謝申し上げます。

二〇一四年十月より、東京医科歯科大学と東京工業大学は統合し、「東京科学大学」となりました。この統合に伴い、本会名称も、二〇二四年六月二十九日開催の献体の会総会での承認を得て、「東京医科歯科大学献体の会」から「東京科学大学献体の会」に変更となります。

会員の皆様におかれましては、会員であることに変わりはございません。現在お持ちの登録証もそのままご使用いただけます。また、献体の会事務局および代表番号の連絡先につきましても、これまでと変更はございません。

なお、登録証を紛失された場合等で、登録証の再発行をご希望される場合は、「東京科学大学献体の会」の名称での登録証をお送りいたします。

今後とも変わらぬご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

◎献体時のお引取り可能な範囲について

献体の会会報「けんたい」や献体の会総会において、以前よりお伝えしておりますが、献体時のお引取りに伺うことのできる範囲（お迎え先）を、東京科学大学（旧 東京医科歯科大学）より四十キロメートル程度以内を目安とさせていただいております。お引取りに伺うことのできる地域については下記の表の通りです。

東京都	神奈川県	千葉県	埼玉県	茨城県
東京二十三区、立川市、武蔵野市、三鷹市、府中市、調布市、町田市、小金井市、小平市、日野市、東村山市、国分寺市、国立市、狛江市、東大和市、清瀬市、東久留米市、武蔵村山市、多摩市、稻城市、西東京市、八王子市、昭島市、福生市、青梅市、羽村市、あきる野市、瑞穂町、日の出町	横浜市、川崎市	千葉市、市川市、船橋市、松戸市、野田市、習志野市、柏市、市原市、流山市、八千代市、我孫子市、鎌ヶ谷市、浦安市、四街道市、印西市、白井市	さいたま市、川越市、川口市、所沢市、春日部市、狭山市、上尾市、草加市、越谷市、蕨市、戸田市、入間市、朝霞市、志木市、和光市、新座市、八潮市、富士見市、三郷市、蓮田市、吉川市、ふじみ野市、白岡市、伊奈町、三芳町、宮代町、杉戸町、松伏町	つくばみらい市、取手市、守谷市、利根町

したがって、お引越しなどによりお住まい（献体時のお迎え先）がこれらの地域よりも遠方となる可能性が高い場合には、お近くの大学の献体団体に転属していただくことをご検討いただきたくお願い申します。お近くの献体団体につきましては、献体の会事務局よりご紹介させていただきます。

しかしながら、お迎え先が範囲内の病院や施設、葬儀場などである場合にはお引取りできる場合がございます。ご不明な点がございましたら、献体の会事務局までお問い合わせください。

献体の会会員の皆様には、ご迷惑をおかけして誠に申し訳ございません。東京科学大学への献体をご希望いただいた、そのお気持ちは大変ありがとうございます。ここに改めて関係者一同より御礼申し上げます。何卒ご理解の程よろしくお願い申し上げます。

◎住所変更等の連絡のお願い

住所、氏名、電話番号、ご家族の連絡先等が変更になつた方はできるだけ早く献体の会事務局まで、お電話または文書等によりご連絡お願いいたします。

会員ご本人様が前述のお引取り可能な地域よりも遠方へ住所を移される場合には、お近くの大学の献体団体をご紹介する場合がござります。お近くの献体団体につきましては、献体の会事務局より該当する献体団体をご紹介させていただきます。また、お亡くなりになつた後に他の大学にご紹介することは、非常に難しいため、住所を移される場合には献体の会事務局にご相談いただきたいと思います。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

◎献体手帳について

一〇二六年「献体手帳」をご希望の方は次の要領でお申し込みくださいますよう、よろしくお願ひいたします。

【献体手帳の申し込み方法】

お名前・会員番号をご明記の上、送料として一〇〇円分の切手を同封の上、郵便にてお申し込み下さい。お申し込みは、お一人様一冊とさせていただきます。

なお、ご家族で会員の方が一緒に申し込まれる場合、一冊分は一八〇円分切手となります。三冊以上の方は事務室へお問い合わせください。

申込先

〒一一三一八五一九 東京都文京区湯島一五四五

東京科学大学献体の会事務局

電話 ○三一五八〇三一五一四七

《会員のご家族へのお願い》

会員の方が亡くなられた時は、次の順序でご連絡と打ち合わせをお願いいたします。

一、大学への電話連絡

◎平日 午前八時～三時～午後五時～六時

①東京科学大学献体事務局（直通）〇三一五八〇三一五一四七

②東京科学大学（代表）〇三一三八一三一六一一

平日の勤務時間内出来るだけの対応を致しておりますが、直接献体事務局に連絡をいただいた時、学内に出かけている場合がございます。その時には大学（代表）の電話交換手にその旨をお伝えください。こちらから再度ご連絡申し上げますので、ご遺族代表者の連絡先及び亡くなられた方の会員番号・氏名・死亡日時をお知らせください。よろしくお願い申し上げます。

◎夜間・土曜・日曜・祝祭日・年末年始

東京科学大学（代表）〇三一三八一三一六一一

夜間、土曜、日曜、祝祭日、年末年始などの場合は、大学の電話交換手にその旨お伝えください。担当者の携帯電話に連絡がつく態勢になつております。その際、亡くなられた方の会員番号・氏名・死亡日時・連絡先・連絡者を必ずお知らせください。担当者が学外におります場合には、東京科学大学献体の会の会員であることをすぐには確認できませんので、ご連絡の前に会員であることを再度ご確認いただきますようお願い申し上げます。なお、迅速に対応できるような態勢をとつてはおりますが、諸事情（電波受信の状態が悪いところにいる場合など）により担当者からの連絡が遅れることがございます。大学から、担当者へは連絡がつくまで対応いたしておりますので、ご容赦

願います。

二、大学担当者との打ち合わせ

ご遺族の代表者は次のことを担当者と打ち合わせてください。

- ①大学がご遺体をお迎えにあがる日時
- ②大学がご遺体をお迎えにあがる場所（住所・電話番号）
- ③お棺持参の要否
- ④ご遺族代表者の氏名、住所、電話番号
- ⑤「解剖に関する遺族の承諾書」等の書類は、担当者が後日お送りいたしますので、ご記入、ご捺印をお願い致します。
- ⑥その他：お通夜、告別式をなさる場合にはその日時・場所をお知らせください。なお、ご遺体の移送は大学がお引き受けし、寝台自動車でお迎えに上がります。

三、ご家族に用意していただく書類

- ご遺体移送のときに必要な書類
 - 死亡診断書の写し
一通
 - 死亡診断書の写しをご用意下さい。ご遺体を寝台自動車で移送するとき必要になります。
- 後日、郵送していただく書類
 - 埋葬・火葬許可証
一通
 - 埋葬・火葬許可証は担当医師の死亡診断書を添え「死亡届」を市区町村へ提出すると交付されます。
 - なお、火葬予定場所には「渋谷区代々幡斎場」とご記入ください。

※注意事項

次のような場合、献体をお断りすることができますので、ご了承ください。

- ①事故で亡くなられた場合（交通事故死、水死、焼死、災害死など）
 - ②死亡後、時間が経過し発見が遅れた場合
 - ③病理解剖や法医解剖によりご遺体にメスが入った場合
 - ④大学から遠方で亡くなられた場合
 - ⑤大学から遠方へ転居され、住所変更のご連絡がないまま転居先で亡くなられた場合
 - ⑥死亡後、臓器提供をされた場合
 - ⑦重症感染症（新型コロナウイルス感染症を含む）に罹患し亡くなられた場合
- 右記に該当する可能性のある場合は、担当者にお知らせいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。
- ### 『東京科学大学献体の会会則』
- （名称・事務所）
- 第一条 この会は、東京科学大学献体の会（以下「本会」という。）と称する。
- 第二条 本会の事務所は、東京科学大学医学部に置く。
- （目的・事業）
- 第三条 本会は、会員相互の親睦を図るとともに、医学及び歯学の発展と人類の福祉に貢献するために、会員の遺体を無条件、無報酬で東京科学大学に寄贈することを目的とする。
- 第四条 本会は前条の目的を達成するため、次の各号に掲げる事業を行う。
- (1) 篤志献体に関する広報活動
 - (2) 親睦会の開催

第七条 (会議)

第七条 本会の会議は、総会及び役員会とする。

《東京科学大学献体の会役員》

会長	八一〇
理事	九二二
理事	二七四二
理事	四五六二
献体の会会報編集委員	五二三九
広岡	飯片
田本	宮内
順祐	藤
子子	田尚
	美榮子
	達夫
	静子

《会報製作にあたつて》

◎表紙の写真説明

北アルプス燕岳のイルカ岩

八月下旬、日本アルプスの三大急登のひとつ「合戦尾根」を超えて燕岳（つばくろだけ）を目指しました。燕岳は白く輝く花崗岩の山で、北アルプスの女王ともよばれるとても人気の高い山のひとつです。登山口と頂上の標高差は一二一八七メートル。中房温泉の登山口標高は一四五三メートル。スタートから、厳しい急登が始まります。おおよそ三十分おきに、第一ベンチ、第二ベンチ・・・と休憩場所が設けられています。そのたびに休憩を取り、水分、行動食を取ることが大切です。夏場は、途中の合戦小屋で、有名なスイカを食べてエネルギーチャージができます。塩を振って甘さを際立たせ、かぶりつくと、汗で失った水分、塩分が身体にしみわたります。登り始めて六時間、やつとの思いでたどり着いたのが、宿泊先の燕山荘（えんざんそう）です。食事が美味しい、人気の山小屋です。大きな荷物は山小屋に置いて、さらに燕岳山頂を目指します。その稜線上にあるのが、写真のイルカ岩、一目でわかる登山者の人気者です。イルカ岩の後方には槍ヶ岳を望みます。疲れを忘れる瞬間です。

後日、別の山を登った際にガイドさんから聞いた話です。合戦小屋のスイカの皮は、あえて登山道から離れた場所に捨て、熊のエサにしているそうです。熊が登山道に近づかないための工夫だそうです。昨今の熊騒動、早く落ち着きますように。

今回の表紙はイルカ岩。冬の早朝には雲海が広がると聞きます。その景色を前に昭和世代は『おいら、岬のオ、灯台守イはア』と唄い出しません。二頭のイルカが寄り添うように天を仰ぐ姿は、灯台守夫婦の半生を綴った映画『喜びも悲しみも幾歳月』(木下恵介監督、昭和三十二年)を思い出させます。

舞台は神奈川県の観音崎(かんのんさき)灯台。灯台守・有沢四郎(佐田啓二)は、これから待ち受ける苦労に不安を覚える新妻、きよ子(高峰秀子)にしつかりやろう、仲良くしよう、死ぬまで一緒にいようと呼びかけます。翌日から二人はレンズ磨きを始めます。日本から北から南まで、灯台を転々と移り住む生活が始まったのです。

北海道・石狩灯台。大雪の中、きよ子は産気づきます。産婆が間に合わないと聞くや、きよ子は「あなた、十月号、読んで」と叫びます。婦人雑誌で知識を得た四郎の介助で無事生まれた女児が雪野でした。やがて太平洋戦争が始まります。何とか生き残つたものの、香川の男木島(おぎしま)灯台では息子・光太郎(中村賀津雄)が不良に刺される事件に遭遇します。

もう助からないと病院から四郎に電話するきよ子。台長の代わりはおらず、灯台の仕事が終わつたら行くと伝える四郎。光太郎は枕元のきよ子に大学受験に失敗したことを詫びる。即座にきよ子は反論する。「頭で生きている人がいちばん偉いんじゃないのよ。お父さんは身体と心で生きてきたのよ。」光太郎は目をつむる。「僕、養成所に入つてお父さんと同じ灯台守になるよ。」

息子を喪う悲しみも乗り越えて迎えた雪野の結婚式。夫婦で海外に赴任する雪野たちは今夜、横浜港を出発する。「あの子は俺の手でとりあげた。へその緒を切るとき、手が震えて困つたつて。」御前崎灯台の展望台に四郎ときよ子は身体を寄せ合い、暗い空の彼方に向かって双眼鏡で目をこらす。これまで何万回も船に向けて光を届けてきたのだ。雪野の乗つた船が安全に航行できるよう、自分の手で灯台の灯を点し、霧笛を鳴らすように合図する。響き合う霧笛と汽笛。

ぜひ、改めて表紙からお楽しみいただければ幸いです。(片野尚子)

連絡先	
発行	東京科学大学献体の会
印刷所	小宮山印刷工業株式会社
電話	03-3360-1521